

障害者スポーツを通じた交流活動

～114人の子ども達とともに～



千葉県立矢切特別支援学校

電話 047-312-3010

FAX 047-312-3012

研究のポイント

「障害者スポーツを通じた交流活動」を行い、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて障害者スポーツの普及や「心のバリアフリー」の推進について実践的研究に取り組んだ。また、オリジナル障害者スポーツの開発として、知的障害のある児童生徒が取り組みやすいルール作りやスポーツの開発に取り組んだ。

■学校の概要 <http://www.chiba-c.ed.jp/yakiri-sh/>

開校から3年目の主に知的障害のある児童生徒が通う特別支援学校である。高等学校の跡地を活用しており、広い体育館や教室等は、子ども達にとって安心して伸び伸びと学習ができる教育環境である。児童生徒の在籍数は小学部・中学部・高等部合わせて114名である。

■研究課題

「障害者スポーツを通じた交流活動」というテーマでの取り組みが2年目となり、今年度は「障害者スポーツを通じた交流活動」と「オリジナル障害者スポーツの開発」の2つの課題について実践的研究に取り組む。

「障害者スポーツを通じた交流活動」では、地域の方々や近隣の小学校、老人ホーム等の方々やポッチャを通じた交流会を行い、2020年東京オリンピック・パラリンピックを意識しながら、障害者スポーツの普及と「心のバリアフリー」の推進に努める。

「オリジナル障害者スポーツの開発」では、知的障害のある児童生徒が楽しむことができ、かつ取り組みやすいルール作りやスポーツの開発を目指し、児童生徒の実態把握から実践的な活動を通して考察・開発を行う。

以上2つの課題について、2年目のまとめを行うとともに、今後の教育活動に生かすために整理していく。

■研究の目的と方法

<目的>

- 1 障害者スポーツを通じた交流活動を行い、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて障害者スポーツの普及と障害者理解や「心のバリアフリー」の推進を図る。
- 2 知的障害のある児童生徒が楽しみ、取り組みやすいルールやスポーツの開発を図り、実践を重ねたものをまとめる。また、学校内をはじめとして、地域へオリジナル障害者スポーツとして広めていく。

<方法>

- ・目的1、2ともに学部での取り組みを中心として実践的研究を行う。
 - ・目的1 障害者スポーツを通じた交流活動では、できるだけ同じ交流相手と交流活動を実施し、児童生徒の変容や取り組みの工夫を考察できるようにする。また、交流相手には、アンケート調査を行い、取り組み方の工夫・改善の参考にしていく。
- 「心のバリアフリー」に関しては、アンケート調査から考察を行う。

・目的2 オリジナル障害者スポーツの開発では、小・中学部は、本校の児童生徒の実態に合わせたものとなるが、知的障害のある児童生徒が取り組みやすいルールの考察をしていく。小学部はボッチャ、中学部はフロアホッケーを題材とする。
高等部は、卒業後の余暇活動につながるような、障害の程度に関係なく誰でも一緒に楽しむことができるオリジナル障害者スポーツの開発に取り組む。既存の競技を参考にしながら、矢切特支オリジナルの競技を考案していく。

■研究概要

○成果

1 障害者スポーツを通じた交流活動

①児童生徒が主体的に参加できる活動

主体的に取り組むための視点として、1 ルール理解、活動の見通し、2 自分たちができることについて交流相手に教える学習、3 自信を持つこと、と考えた。どの学部においても、この視点をもって活動したことで、児童生徒が主体的に取り組むことができた。

②「心のバリアフリー」の広がり(他者理解・障害者理解・共生社会のきっかけ)

昨年度から交流していた交流相手でもあったが、今年度初めて特別支援学校の児童生徒とかかわるとい相手も多く、本校の児童生徒について知ってもらう機会になった。

③ボッチャを中心とした障害者スポーツの普及

交流活動や地域のイベント、研修会等でボッチャを紹介したり、体験コーナーを設けたりした。少しずつボッチャの認知度も上がり、夏休みに本校主催で実施した地域との交流行事「やきり de ボッチャ」には、地域からは60名程度の参加者があり、地域とのつながりが持てたり、ボッチャの普及につながったりした。

2 オリジナル障害者スポーツ「キック&ダッシュ」

・児童生徒の主体的な活動

キックベースボールと比べてルールが分かりやすくなったことで、教師の言葉かけや支援を少なくすることにつながり、児童生徒が主体的に活動に参加できる場面が増えた。

・活動を通しての達成感、満足感

自分の投げたボールや蹴ったボールの結果や点数がすぐに出て分かりやすくなったことで、できた実感を味わうことができ、達成感や満足感を感じる児童生徒が増えた。笑顔で競技に参加する児童生徒が多かった。

◆まとめと課題

今年度の研究を通して、交流活動では、誰でも取り組みやすい「ボッチャ」という障害者スポーツをツールとしたことで、障害の有無や年齢、性別にかかわらず同じ土俵に立ち、お互いを認め合う中での自然な交流を行うことができた。このような交流により、「心のバリアフリー」の実現につながられた。

今後も児童生徒の力を発揮できるような様々なツールを活用し、共生社会の実現に向けて実践を重ねていく。

関連資料

- ・「キック&ダッシュ」の関連資料
- ・「心のバリアフリー」アンケート集計結果
- ・矢切特別支援学校研究成果 <http://www.chiba-c.ed.jp/yakiri-sh>

※「キック&ダッシュ」

県内の特別支援学校で取り組まれているキックベースボールのルールをより多くの知的障害のある生徒が取り組みやすいように簡略化したもの。